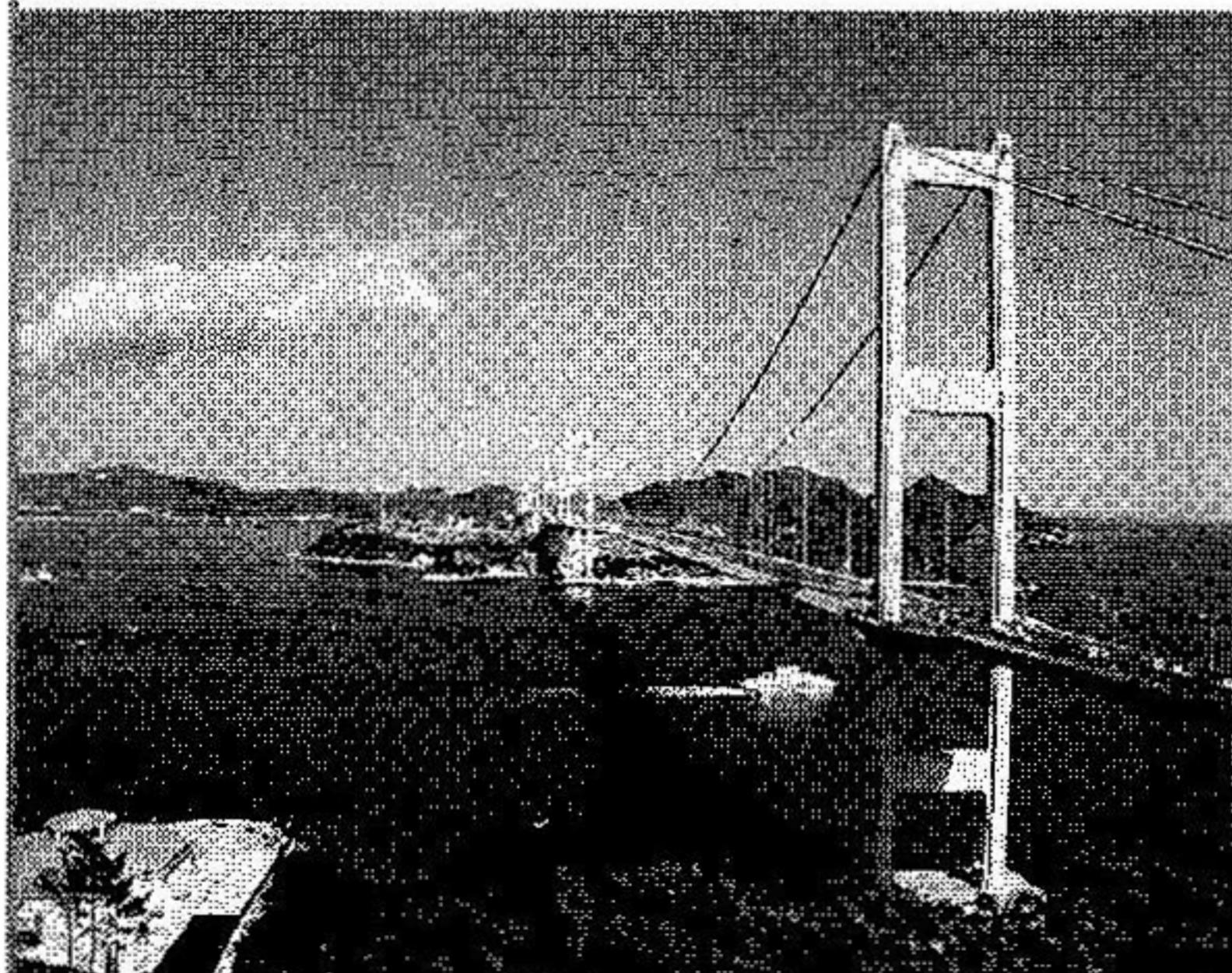


# 全国自治体 観光プランの今

## 第13回

しまなみ海道——愛媛県今治市



出雲大社——島根県出雲市

しま 嶋 づ 津 隆 文

松蔭大学観光文化学部教授  
観光文化研究センター長

世界を結ぶご縁都市、  
ご縁を大切にする出雲

島根県出雲市

出雲市と聞くと誰もが出雲大社を思い浮かべる。圧倒的な知名度の高さを誇り、他の自治体からは観光資源としての出雲大社に羨望さえ抱かれるほどである。

出雲は「神話のふるさと」とされ、『古事記』『日本書紀』『出雲風土記』の舞台であり、そのゆかりの地が数多く存在する。旧暦10月は一般に神無月といわれるが、神々のふるさと出雲では、この月に日本中の神が出雲に集まる神在月と呼ぶ。

こうして、出雲大社や神話ゆかりの地などの観光資源を媒介に、多くの観光客を吸収している出雲市が、平成21年3月に出雲市観光基本計画を作成した。それを軸に、この地の観光振興の取り組みについて紹介する。

## 1 観光の現状と課題

出雲市ではここ数年、観光入込客数は増加傾向にある。平成19年に古代出雲歴史博物館がオープンしたこともあり、観光入込数が850万人を超えた。アンケート調査（平成18年）での観光の特徴は次のようになる。

- ① 出雲大社へは84%と大部分の人が立ち寄っている
- ② 出雲市外への立ち寄り先は「松江市内・玉造温泉」である

- ③ 「個人・グループでの観光旅行」が70%を占める
- ④ 交通手段は自家用車が6割弱と最も多い
- ⑤ 一人あたりの観光消費額は日帰り客で4123円、宿泊客で2万1522円である

しかしその一方で、課題も少なくはないようだ。

第1は滞在力の低さである。最近では、自分の趣味や趣向にあつた場所を求める傾向がある。しかし、出雲大

社+アルファとしてのブランドイメージが不足し、宿泊客も少ない。それゆえ、滞在時間を増やす、滞在力を高めることが肝要だとする。

第2は、周遊力の弱さである。観光客は、出雲大社と

あと1つの観光資源を廻る程度にとどまつておらず、市全体への周遊には結びついていない。平田（雲州木綿の集積地）、佐田（須佐之男命のゆかりの地）、多伎（日本海や夕日の景観地）、湖陵（国引き神話の舞台）など、点在する観光資源がありながら、周遊力は弱い。

第3は、情報発信力の不足である。旅行の個人化、グループ化などでニーズが多様化していることへの対応が十分ではない。そこで、的確な情報伝達ツールの選択とタイムリーな情報発信が課題だとする。

第4は、事業推進力が不十分なことである。出雲の観光は、特定の観光施設や業者などに限定しがちとなっている。それを排し、市民、行政、関連団体などが幅広く連携していくかねばならない。そのために、組織づくりが必要だとしている。

## 2 出雲市観光基本計画

出雲市観光基本計画は、右の課題認識の上に立って、平成21年に策定された。上位計画としては、出雲市の基本構想『21世紀出雲のグランドデザイン』（平成17年）があり、そこで謳う『21世紀出雲神話観光大国の創造』

を基本方策とする。目標は、観光交流人口1000万人の実現だ。これを踏襲して出雲市観光基本計画は策定され、そこで設定されたのが次のテーマである。

### 『神話の夢舞台・出雲』

世界を結ぶご縁都市、ご縁を大切にする出雲

（神話と歴史・文化の地から本物の豊かさを提供す）

すなわち、計画のキーワードは「ご縁」なのである。神在月に全国から800万の神々が集まり、男女の縁などが話し合われることから、縁結びの神となつた出雲大社。それだけに、「ご縁」を求めて来訪し、「ご縁」ができて何度も訪れてもらうことを目指そうとするのである。出雲ならではの地域色ある、戦略的視点といえる。このテーマをふまえ、観光基本計画では4つの基本方針を設定した。

## 3 計画の4つの基本方針

### (1) 神話の舞台のご縁づくり

基本方針の第1は、神話の舞台のご縁づくりというものであり、前述の滞在力に着眼する。

例えば、出雲大社門前町の拠点性の強化として、門前

町まちあるき空間を整備する。神門通りや阿国通り、神迎えの道などの景観や歩道、案内所の整備を進め、ゆつたりとした時間を過ごさせる。

他方で、市内の自然、海、歴史・文化などのエリアごとに特色ある拠点づくりを目指し、海のレジャースペースとして、多伎での海浜リゾート整備や、日御崎での海上メニューやの設定を図る。あるいは、「弥生の森博物館」（西谷墳墓群）や、たたら製鉄遺跡を歴史文化の探求空間として整える。さらに、食の魅力づくりを進めるとし、出雲そばブランドを生かして食べ歩きマップやイベント開催なども考えようとしている。なお本基本計画では、活性化の拠点として「出雲阿國座」なる拠点づくりの建設を掲げていた。しかし、平成21年の市長選挙でこのプランは中止された。箱物づくりへの市民の躊躇が示されたものといえようか。事実として記しておくこととする。

### (2) 出雲路をめぐるご縁づくり

第2は、出雲路をめぐるご縁づくりと称して、周遊力を考えた観光地づくりを目指すものである。出雲の神話、歴史・文化などを起源とした物語性、テーマ性の強い観光ルートを設定したりする。

例えば、神話・縁結びルートの開発である。また、歴史文化ルートや海の風景（夕日のスポット）ルート、さらには農山村風景ルートなどを設定する。一方で、交通ネットワークの充実にも配慮する。車やタクシーを利用したモデルコースとしては、「スサノオの道」や「もののけ姫」「出雲王国の祭祀」（出土地めぐり）などといったきめ細かいアイディアも工夫される。

### (3) 世界に発信するご縁づくり

第3は、世界を視座においてのご縁づくりであり、出雲ブランドを発信しての観光地づくりである。

具体的には、食のブランド、神話ブランド、温泉ブランドなどの開発を進め、出雲全体としての地域ブランド化の推進も図る。同時に、観光情報編集体制づくりや、イベントによる誘客促進を図ろうとするものである。

### (4) 明日につなげるご縁づくり

第4は、推進組織の問題である。事業推進力と称し、ホスピタリティのある観光地づくりを目指そうとする。

市民の出雲への愛着や誇りなどを深め、地域全体のおもてなし力を強化しようとするものだ。

例えれば、出雲学講座や出雲まちづくり講座を実施する。

あるいは、出雲神話伝承・古代出雲ガイド、セールスパーソンを育成する。さらに、おもてなし力を強めようと、民間の力、特に観光協会の活動に期待するとして、昨夏から会長に地元の企業人が就任された。それまで市長が就任していたものだ。注目すべき動きである。

## 4 天の利、地の利を生かす

ところで、出雲市観光基本計画には、かなりのスペースを割いて観光による経済波及効果について掲載している。他自治体から「神頼みの観光」などと言われそういう中で、説得力ある数値を示すことで、市民に観光振興の必要性と協力を求めようとしたのであらうか。

平成19年度の出雲市の観光入込客数は856万人、宿泊客数は46・4万人。消費額（日帰り客4123円、宿泊客2万1522円）の総額が242億円とある。そして生産波及効果としては302億円とされている。これに対しても観光基本計画では、

- ① 観光交流人口1000万人が実現した場合
- ② 観光消費単価が増加した場合
- ③ ①も②も達成した場合

の3つのパターンで経済波及効果を算定し、丁寧に数値を掲載している。ちなみに③の場合（1000万人達成、一人あたりの消費額1・2倍）では、観光消費額は330億円、生産波及効果は410億円と推定している。

この出雲市観光基本計画の策定から1年。これからどのような取り組みをしていくのか。観光交流推進課の福間浩課長の発言は印象的である。

「出雲にとどまつてもらうこと。すなわち滞在力、周遊力を高める仕掛けを一番重視しています。それにしても今の出雲は追い風が吹いている。観光振興への地の利と天の利があるのですよ」。

地の利とは、山陰自動車道が平成21年11月に出雲まで開通し、松江との時間的な距離が30分と縮まったことである。天の利とは、出雲大社が60年ぶりに大修理を行い、大遷宮が平成25年に予定されていることである。3年後の平成25年には、本殿遷座祭が行われる。この一連の取り組みが、大きな起爆剤になるというのだ。

神々の土地にふさわしい、観光振興の意気込みを感じるものである。

## 「海響都市のブランドを創る」が目標

### 愛媛県今治市

#### 1 観光計画の背景

今治市は瀬戸内海に面し、風光明媚、気候温暖の地である。古くは村上水軍などの活躍の舞台となり、海を利用了した経済産業の発展の歴史を持つ。人口18万人。今治と尾道を結ぶ「瀬戸内しまなみ海道」が平成11年に開通したことにより、中国四国の交流の拠点となつた。しかし、観光振興という面からは、しまなみ海道の年間総交通量が約800万台を超えているにもかかわらず、ところによつては観光スポットの入込客数が減少している。今治市は、道後温泉という全国的な観光地域に隣接する。それだけに、通過点になつてしまつてしているのだ。

そんな中で、今治市の観光振興計画は平成21年3月に策定された。その計画方針が以下の5つであることに、この辺りの課題が反映されている。

① 通過観光から目的地としての観光のまちへ

② 近隣観光地と共に存し独自の魅力を持つ観光のまちへ

③ 豊富な観光資源を活かす観光のまちへ

④ 交通のターミナル性を發揮できる観光のまちへ

⑤ 観光志向の変化に対応し先取りできる観光のまちへ

この観光振興計画の答申に当たって、取りまとめをした計画策定委員会の委員長は、「まち中、山里、島しょの3つのエリアをどう連携させていくかを考えました」と語っている。その趣旨には2つの意味があると言える。

1つは、この今治市が、「まちなか（街）」「山里（山）」「島しょ（海）」の3つの多様な顔を持つていてことだ。瀬戸内海に大三島など多くの島が配され、南には鈍川温泉などの山里がひかえ、中央には今治の市街地を抱える。これら特色ある地域を、どう補完しあいながら生かすか腐心したものだ。もう1つは、今治市が、平成17年に12もの市町村が大合併したことによるものである。来島海峡がまちの真ん中にあっての意味あいと、この「海のまち」の産業・観光・生活を交流させ、活力を響き合わせて未来を拓こう総合的に活性化していくか。ともすればバラバラにならない広範な地域を何とか包摂し、全体的に底上げしようとする観光計画づくりだったといえるのである。

## 2 観光計画の概要

### (1) 基本コンセプト

今治市が、観光振興計画を策定するに当たって力を入れたのは、総合的なブランドイメージづくりである。観光資源が海、山、市街地にわたり、食、遊び、景観などの楽しみも多い。しかしその多様さが分散してしまう弱みがあり、観光振興の共通の目標が必要だとした。そこで観光像として考え出したのが、

### 「海響都市観光のブランド＝いまばり」

という設定であり、その視点からの観光資源の創出と磨き上げを目標としたのである。

そもそも「海響都市」というフレーズは、12市町村合併後の平成18年に策定された、今治市総合計画の将来像として採用されたものである。来島海峡がまちの真ん中にあるとの意味あいと、この「海のまち」の産業・観光・生活を交流させ、活力を響き合わせて未来を拓こうとの決意が込められた。観光振興計画はそれを踏襲し、イメージアップを図ろうとしたのである。

## (2) 計画期間、数値目標

計画期間は、10年（平成21年度から30年度）である。しかし、具体的な提案としている施策は平成21年度から25年度までの5か年である。計画の見直しは5年ごとを基本とし、社会経済の変化に対応していくこととした。

観光入込客数の目標は、平成25年度に530万人とする。計画策定の基礎となつたのは平成19年度の499万人であり、そこから31万人のアップを図るとするものである。20年度はすでに515万人と16万人増加し、目標幅の半分が達成された。この数値目標は、いささか控えめだつたと言えるかもしれない。

### 3 観光計画の5つの目指すべき方向性

基本計画は、その目指す方向性として、5つの柱を提示している。

#### (1) いまばりの魅力

柱の1つめは、「いまばりの魅力」づくりと称して、「いまばりから中四国」へ、「中四国からいまばり」への流れを創出するとの方向性である。すなわち、観光都市のブランド創出を図り、まず「いまばりから中四国」へ

の流れをつくる。今治への観光客が中四国全体の観光地にも立ち寄れるように資源の整備を進める外、観光振興を通して中四国地域が相互に補完しあえるまちづくりを牽引しようとするのである。他方で「中四国からいまばりへ」の流れづくりにも努め、中四国の観光客が、今治にも立ち寄れるような整備を進めること、あるいは広域観光圏の形成に取り組むこととするのである。今治市は四国の玄関口であることから、それを通過点でなく結集軸にしようとする戦略的発想なのである。

#### (2) 海の幸・山の幸の魅力

2つめは、旅する人の楽しみは「食」であるとの視点に立つものである。今治の豊かな海の幸、山の幸を観光客に楽しんでもらう魅力とともに、特産品づくりを支えようとするものであり、市内あちこちで食を楽しめる店づくりやまちづくりを進める。一方で、加工・特産品の充実を目指す。新しい特産品をつくり、特色あるサービスづくりに取り組む。さらに食のイベント・情報提供を重視し、郷土料理を大切にし、食のコンテストや、歴史文化と食の観光コースづくり、食のコンベンションの誘致を進めるなどとするものだ。

### (3) 交流と体験の魅力

3つめは、松山や中四国の広いつながりの中で、魅力ある広域観光圏をつくることで、都市観光のブランドをつくりうとする方向性である。近隣観光地との共存を図るものといえようか。また、グリーンツーリズムやブルーツーリズムを通じて、海や山の体験型観光を味わえるようになる。造船や当地名産のタオルや瓦などの産業観光や島々の景観を活かしたイベントやコンベンションなども誘致し、ブランドを向上させようともしている。

### (4) 海遊空間の魅力

4つめは、旅の喜びは心や身体を戸外で自由に解き放つことにあるとの観点に立つものだ。海岸線が長く伸びる空間での磯遊び、スポーツ・レジャーなどの体験を重視する。そしてこれらの観光スポットを活用し、観光都市のブランドを向上させるとするものだ。

例えば、海と橋、農漁村の集落、港や町などがつくりだす多様な景観スポット（ビューポイント）が活かされるまちづくりを進める。あるいは環境の保全と向上を重視し、きれいな海浜を保全することが出来るよう、環境を大切にするまちづくりを進める。さらには、歴史・文

化の足取りをたどり、今治の歴史文化の体験を通じて楽しめるまちづくりを目指そうとするものだ。

ちなみに今治市は、世界的建築家である丹下健三の育った地だ。今治市庁舎、今治市公会堂、市民会館など、丹下の手掛けた建築物が7か所も存在している。これらは、海遊空間としての今治の恰好の観光施設であり、その活用にも工夫をしようとしていることは興味を引く。

### (5) おもてなしの魅力

5つめは、おもてなしの重視である。楽しみを十分感じ取ることができるのは、そこにおもてなしの心が示せるかどうかにかかる。このおもてなしを市内のみんな場面で示せることで、ブランドを支えるとする方向性だ。そのため観光事業者から市民まで、自然におもてなしできるような心を育てるとする。あるいは、快適観光への環境を整えるとし、道路・交通網の整備、JR今治駅や今治港などの看板、道路標識の整備、観光スポットでの観光情報の提供などを進めるとするのである。

## 4 特にこんな動きも

ところで昨今、今治に人気スポットが登場し、話題を

呼んでいる。それは大島の下田水港から3・5キロの沖合に浮かぶ人口25人の小島である。ここには日露戦争のバルチック艦隊を迎え撃つために建造された日本軍の要塞跡が残されているのだ。しかも砲台や赤レンガ造りの発電所、兵舎はほとんど当時のままなのだ。折りしもNHKで「坂の上の雲」が放映され始めたところである。ここに注目が集まらない訳がない。ロシア海軍の関門海峡突破に備えて、広島県の竹原市の大久野島と合わせて建設された芸予要塞の一部である。明治の日本人の心を知る上でも、大いに関心を寄せるというものだ。

かように今治には、日露戦争のみならず、村上水軍を含め、数多くの日本史の舞台がある。しまなみ海道の、未來の發展を象徴する最新鋭の橋梁が走る眼下に、歴史ツーリズムのポテンシャルが広がることを思うと、今治市の時空を超えての観光の将来性には大いに期待が寄せられるというものだ。



姉妹都市交流とは

自治体が中心となつて国内外の諸都市との友好親善と市民文化交流や行政交流を行う提携活動をいう。我が国初は、昭和30年の長崎市とセン・ト・ポール市（米国）で結ばれた。その後増加し1980年代には急増している。海外との提携自治体数は平成20年で840自治体（40都道府県、800市区町村）、提携件数は1567である。

相手国は米国（24県、413市区町村）、中国（34県、292市区町村）、韓国（7県、113市町村）、オーストラリア（6県、102市区町村）の順である。

提携のきっかけは、自然や文化、産業、人口などの共通点で選択されることが多い。東京都はニューヨーク、北京、パリ等といつた大都市と、京都市はボストン、フイレンツェ、西安等の歴史文化性のある都市と連携する。その他、豊田市とデトロイト市（自動車）、浦安市とオーランド市（ディズニーランド）、鹿児島市とナポリ市（火山）等の姉妹都市がある。当初の単なる親善訪問から、子ども文化交流（学校訪問、ホームステイ）、行政交流（環境対策、都市計画等の情報交換）、産業観光交流（企業誘致、観光振興）など多様なプログラムが組まれる。しかし昨今、財政難や海外治安情勢の悪化で、交流活動は停滞気味である。

(出典：松蔭大学編「観光キーワード事典」)